

埋没便益研究の視座：アダプティブマネジメントによるアプローチ

岡田憲夫¹

¹京都大学防災研究所〒611-0011 宇治市五ヶ庄
E-mail: n_okada@drs.dpri.kyoto-u.ac.jp

埋没便益に関する研究はまだ緒についたばかりである。本発表では、「埋没便益」を狭義には、「能力限界にいたってはじめてその機能の限界水準が顕在化するような陰的な機能を便益評価したもの」と定義する。より広義には、「能力限界にいたってはじめてその機能の限界水準や存在の消滅が顕在化するような陰的な機能や存在を見えるように表現したもの」と定義する。

一方、長期的な時間軸に沿って、カタストロフな(低頻度・甚大被害型)災害リスクを持続的にマネジメントするためには、以下のような入れ子構造の多重的なアダプティブマネジメントの方法論を構築し・実践していくことが総合的なリスクマネジメントとして戦略的に有効であると考えられる。それは、より高頻度ではあるが、被害はそれほど大きくない災害が当該地やその近辺(あるいは情報・コミュニケーション技術の活用によって擬似的に近距離化された地域)で発生した際に、そのタイミングよく活用して、その都度小さな(より被害スケールは小さいが高周期で回る)Check-Action-Plan-Do (CAPD)サイクルを律動的に援用(シグナル化)していくことにより、カタストロフな災害リスクに対しても、結果的に社会の総合的な災害対応能力を高め、適切に維持していく上で効果的になるようにマネジメントのことを指している。

本発表では、日常的にほとんど顕在化しないために減災のためのシグナル化が起こらない陰的な機能や存在に着目して、これをアダプティブマネジメントとして活用するアプローチを提案する。これにより、埋没便益研究への一つの視座を提供するための議論を展開するきっかけとすることを提案する。

キーワード：埋没便益、災害対応能力、アダプティブマネジメント、CAPD サイクル、カタストロフな災害リスク